

# 時代の風

長谷川眞理子

総合研究大学院大教授

私は講演などで、「最近の20万年」という言い方をよく使う。ほとんどの聽衆さんは20万年を「最近」だなどとは思わないのであきれてしまう。しかし、生物進化では、経済の動向などとは異なり、20万年は比較的短い時間なのである。

私の専門は、動物の行動と進化の研究だ。もともと人類学の出身で、人類にものとも近縁な動物であるチンパンジーの研究をしていった。その後、シカ、ヒツジ、クジャクなど、人類とは遠い動物の研究を経て、今は、ヒトの行動と心理を研究している。この分野は、人間行動生態学、進化心理学などを総称して「行動生態学」と呼ばれる。

現代の社会には、実にいろいろな問題がある。ネットやソーシャルメディアなど、新しい情報。コミュニケーションのツールが普及

# 現代社会の問題と進化

て現代的課題の解決策を考えようとするとき、「最近の20万年」の視点を持つことは、とても重要な立場だと思ふのである。



三望月亮一摄影

# 「最近の20万年」の視点を

したことから派生する諸問題題、昨今話題の保育所が足りないことをはじめとする、働き方や暮らし方の問題、いじめ、自殺、児童虐待、介護などの社会問題にまつわる問題、エネルギー、食糧、環境問題、テロや紛争などの国際問題など)。これらはみな、今の最先端の社会が抱える問題である。しかし、これらをわめ

アフリカの一角でのことだった。そのころの人々は、狩猟採集しながら移動する暮らしをしていて、電気やガス、水道は当然存在せず、家を建てるのもなかつた。だから、私たちとはまたたく間に異なる存在だとと思われるかもしれない。が、からだも脳も基本的な遺伝子構成も、今の私たちと同じである。

実のところ、ホモ・サピエンスは、20万年前に出現して以降の19万年間、全員が狩猟採集生活をしていました。およそ1万年前に、一部の社会で農耕と牧畜が始まったが、すぐに世界中の人々が農耕牧畜の定住生活に変わったわけではない。それからだんだんに都市文明が始ままり、長い時間をかけて、ほぼ全世界の人々が

狩猟採集生活をやめた。現代の科学技術文明の先進国に暮らす人々も、アフリカの農耕民も、南米の奥地で今でも狩猟採集を続けている人々も、そして、20万年前の化石のヒトも、みな同じからだと同じ脳と、基本的に同じ遺伝子構成を持つているのだ。

であり、私たちのからだや脳ではない。今の技術と比べれば粗末に見える石器ややりを作りだした何万年も前のヒトの脳は、すでに、今の私たちの脳と同じであった。20万年前のホモ・サピエンスの集団に生まれた赤ん坊を、タイムマシンで現代の先進国の家庭に運

つかないのと同じである。

「最近の20万年」どころか、もっと以前からの進化で作られてきた。その欲求のあらわし方と、急速に発展した技術が生みだした現代社会のあり方とのギャップが問題なのである。本稿では、現代のさまざまな問題を、近代のさまたげの視点から考えていこう。